社会部会（中学校）

| |
|---|
| 県研究主題<br>社会的な見方や考え方を養い、よりよい社会の形成に自ら参画していく資質や能力を育成する学習指導と評価の工夫・改善 |

提案１　　提案者　鈴木　正博（川崎地区）

| |
|---|
| ＜研究主題＞<br>「知って、分かって、社会に生かせる」社会科学習の在り方<br>―問題・課題解決と意志決定を促す学習過程を通して― |

１　提案内容

（１）主題設定の理由

急速に変化する国際社会を生き抜く力が必要となる現在、児童・生徒の社会科学習の理解と有用感が他教科に比べて低い実態、「わかる」社会科学習の研究成果をふまえ、「わかった」ことを「社会に生かせる」社会科学習の在り方を探っていくために設定した。

また、その際、これまでも社会科で重視されてきた問題解決的な学習過程に加えて、将来の社会的行動の基礎になる学習として、意志決定を促す学習過程を取り入れることとした。

（２）研究内容

小学校４年間、中学校３年間を合わせた、小中連携による計７年間の社会科学習を行うことで、児童・生徒に社会のつながりを理解させ、「知る、わかる、社会に生かせる」を合い言葉に、学んだことを社会に生かし、よりよい社会をつくる子どもたちを育てることを目指した。

（３）３つの検証授業

①中学３年　歴史的分野

「戦後 70 年を迎えて私たちができることは～国際平和会議 U-15 日本代表として～」

戦後史の２つの項目を、「戦後の日本」という１つの単元にまとめ、前半部では「なぜ日本は支配される国から援助する国へと発展していったのか」という課題解決をおこない、単元末で上記のテーマにより、現在起きている問題に自分なりの考えを見いだし、意志決定を促すためのスピーチ活動を行った。これにより、現代の日本を生きる一人としてこれからを考え行動しようとする姿勢をもてるようにした。

②小学５年

「食料生産を支える人々～日本の未来の姿を考える～」

「これからの日本が食料を確保していくためにどのようなことが大切になるだろう。」というテーマで、『農家』や『私たち』、『行政』と様々な視点を考えた上での意志決定をさせ、様々な視点から公正に判断し、自分の立場で食料生産の発展を考えようとする態度をもてるようにした。

③小学６年

「歴史から未来へ～歴史を学ぶ意味・生き方を考える～」

「歴史を学ぶ意味を考えることによって見えてくること」というテーマで、学んできた

歴史上の人物についてのカードを作成する活動を通し、先人たちの行ったことが今につながっていることを意識させた。これにより、先人たちへの感謝と未来を創る自覚、今やこれからの未来に役立てることができる点に気付かせることで、先人たちとのつながりと感謝、未来を創る自覚をもてるようにした。

（４）成果

①「知って、わかって、社会に生かせる」社会科学習により、社会科で身に付ける態度は何か、そのために理解することは何か、そのために習得する知識や技能は何か、を明確に指導することができた。

②社会の一員としての自覚と責任をもち、よりよい社会をつくろうとする態度を養うことにつながるようになった。

③既習事項をもとに学ぶ意欲をもち、理解を深め、有用感を高めることにつながった。

２　協議内容

（１）効果的な学習課題の設定について

事象の始めと終わりを提示し、その間を考えさせるような学習課題がよい。

「なぜ」、「どのように」、「どうすれば」を意識した課題設定がよい。

（２）生徒主体で考えさせた場合に出る、実際社会と生徒の考えとのズレについて

ズレをあまり重視せず、様々な意見同士のぶつかり合いにより根拠や考えの変容が起きたかどうかに目的を置くべきである。

３　まとめ

生徒が課題意識をもつことが重要である。中学校の社会科は特に具体と抽象を往還する学習であるので、課題の設定には「どのように～」という事実追究や「なぜ～」という原因追究、「どうしたらよいか」という意思決定が有効である。

小学校の歴史は「歴史を学ぶ意味を考える」ことを中心に進めているが、中学校ではさらに加えて、自分の立場の自覚や責任から意思の決定が必要である。

本提案では、知識を理解したその先に、身に付けた知識を生かす時間を作ることや、小・中学校が連携した７年間という見通しの基に作成された学習過程を作成することで、知識の活用や社会科の学びのつながりを意識することができた。

提案２　　提案者　柳田　竜吾（県央地区）

＜研究主題＞
資料を読み取る力を養い言語活動の充実を図るための指導の工夫

１　提案内容

（１）　主題設定の理由

学習指導要領では言語活動の一層の充実が掲げられている。特に社会科では、資料を読み取り、そこから分かることをもとに論述したり、説明したりすることが重要である。

しかし、生徒の実態は社会的事象に対する知識を身に付けることには意欲的である一方、資料から情報を読み取る力、文章化して論述する力は後回しにされている傾向が見られる。身に付けた知識をもとに思考し、自分なりの社会認識を築く、社会科の目指すべき方向性と目の前

の生徒の実態にずれを感じ、今回のテーマを設定した。

（２）　実践の概要

①　生徒の実態

研究の前後における生徒の変化を見取るために、平成27年度２学期期末試験の問題の中で論述問題（２つの資料から分かる情報をもとに、50字以上60字以内で問いに答える形式の問題）を出題した。この結果から、論述問題に対して苦手意識を持ち、解答できない、解答しない生徒と、十分に正答を記述することができる生徒との二極化が顕著であることが分かった。

②　研究の仮説

生徒に、論述問題に解答させ正答を導き出す力を身に付けさせるには、「資料から情報を読み取る力」「読み取った情報を言語化する力」「言語化された文章を再構成する力」の３つの力が必要だと考え、実践を行った。

③　実践について

公民的分野第５章「地域社会とわたしたち」（東京書籍）の単元で実践を行った。

| １時間目 | ２時間目 | ３・４時間目 | ５時間目 |
|---|---|---|---|
| １つの資料から様々な情報を読み取れる資料を用意 | ２つの資料から分かりやすい情報を読み取れる資料を用意 | ２つの資料から知識をもとに課題に対して正確な情報を読み取れる資料を用意 | 複数の資料から生徒が主体的に情報を読み取れる資料を用意 |
| １つの文に言語化する<br>(25 字以下) | ２つの文で言語化し、１文にまとめる<br>(35 字以下) | ２つの文で言語化し、１文にまとめ、文章を再構成する<br>(40 字以下/60 字以下) | 自分の考えを導き出し言語化し、構成する<br>(100 字以下) |

④　成果と課題

資料から読み取れることは必ずしも一つではなく、正解は複数あるということを生徒は授業で認識し、論述問題へ取り組みやすくなったと考える。また、書いた答えを生徒同士互いに見せ合う活動を取り入れたことで、苦手意識を持つ生徒も意欲をもって活動に参加し、全く何も書かない生徒はほとんどいなかった。

本実践後の平成27年度学年末試験において論述問題（３つの資料から内容を読み取り、60字以上70字以内で問いに答える形式の問題）を出題した結果、生徒158名のうち解答欄に何も記入しない無回答者が、２学期期末試験の人数から半減した。これらのことから、本実践において論述試験へ取り組む意欲が高まったこと、資料を読み取る力や文章化し論述する力が高まったことが明らかになった。

課題としては、仮説で立てた３つの力のうち、どの力が身に付き、どの力が身に付いていないのか、ということを生徒一人ひとりに対して見取ることができなかったという点が挙げられる。

2　協議内容

評価の観点は「社会的な思考・判断・表現」と「資料活用の技能」のどちらで見取るべきなのかという意見や、論述指導の際には教員の「添削する力」は不足していないか、自分の指導を適宜振り返ることが必要ではないかという意見、何のために論述をさせるのか、なぜこの資料を読む必要があるのかということを、教員は常に振り返りながら指導にあたることが大切であるという意見が出た。以下は、グループで協議した結果である。

Ａグループ…単元のはじめに単元のゴールを意識させることが大切である。

Ｂグループ…単元を通して何を学んだのか、自分の言葉でまとめる。

Ｃグループ…単元を１枚にまとめたワークシートを作成し、生徒の学びを可視化する。

Ｄグループ…生徒が「学びたい」と思える授業を展開し、生徒に「学びの場」を提供する。

Ｅグループ…年表作成で歴史の流れを大きく掴んだり、まとめに小論文を書いたりする。

Ｆグループ…「自分の生き方」や「社会に生かすこと」にどのようにつなげるかを考える。

3　まとめ

言語活動の充実を達成するための、ひとつのユニークな実践であった。論述においては高度な取組や高度な力が求められる。そのためには、「分かる授業＝楽しい授業＝自分の為になるという実感」を生徒にもたせることが大切である。課題は、論述させたあとの添削や評価をどうするのかということ、一つの単元、一つの教科だけで書く力を伸ばすのではなく、学年や学校全体で取り組む意識が必要であるということだと考える。

また、次期学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」という言葉がキーワードになる。社会科の授業を通して「何ができるようになるか」ということを考えていく必要がある。また「社会的な見方・考え方」とは、「視点や方法」のことであるということを理解し、社会科の学習をどのように社会に生かしていくのかを考え続けなければいけない。そのためには、教員が日々学び続け、実践を積み重ねていくことが大切である。